重修真書太閤記

四編七

~13
459
37

特18
書庫門
459
37

消 福兼

重修真書太閤記四編巻之拾九

浅井長政宮部山の城を攻る事

并木下藤吉郎後詰の事

浅井備前守長政朝倉式部大輔景鏡両勢二万餘人と以て宮部の城へ押寄稲麻竹葦のごとし如く十重廿重取圍て責ること甚急なりけるを虎御前山より木下藤吉郎ら見かけ後詰をでらあふべうらびと用意ふしける時越前より降参を前波富田毛谷増井の四人秀吉よろこうて罷り向うんと望うらぐ秀吉その誠心を感じ然ば共々

同攻會印

打出べ〳〵但四人衆ゟい別ゟ頼むべき子細あうと
てまり雲雀山ゟ陣取〳〵礒野丹波守へ謀を示し合
せ合圖違變るゝ様ゟと約束し秀吉い逞兵そぐつ
て八百餘人と一手とゝ〳〵前波九郎兵衛冨田彌六
郎ゞ勢七百餘人と右備と〳〵木下ゞ組下中条又兵
衛梶原勝平両人と目代と〳〵て是ゟ加え増井毛谷
ゞ勢ゟ木下ゞ組下と加え瀧川彦右衛門大橋長兵
衛両人と目代と〳〵てこれも同〳〵七百餘人と左備
と〳〵虎御前山の留守ゟい木下小一郎秀長青木勘
兵衛藤井又太郎中村彌助を殘〳〵置宮部と〳〵て
馳〳〵とやゞて人数と魚麟ゟつ〳〵孫例の瓢箪の

馬印と真先ゟおゝ〳〵立五色の吹貫をふさゐびうと
雲の峯と發ちるゞ〳〵潮の次第ゟ満るゞ如く静
静と淺井朝倉ゞ二万餘騎のうしろよう會釋もゐ
く切てかゝるとゞ加藤虎之助一番ゟ鎗と合をうゝ
ゞ加藤ゞ郎等木村又藏例ようもてやく駈むうひ
忽一人と切倒〳〵耳をそいて袋ゟ入猶をそ〳〵んで
働きけるゝゞ清正いよく勢を得多く敵を突伏た
ゞ福島市松片桐助作堀尾茂助中村孫平治蜂須賀
又十郎いづとも劣らゞ切伏突伏走ゞ廻る有様い
猛虎の群羊と驅ゟ似たゝ淺井朝倉の勢い多けと
ども思ひもよらぬ木下の後詰ゟ切立られ狼狽を

あとにひかへたる長政のことを急度うて木下が後援せんとうちかねて知たることなるゆゑ周章ぐことかいその上味方よりうべうい十分一あも足ぬものと備を占て取こめよ一人を漏さずうちとり血眼ふるひて下知しけれぞ淺井が勢々二川より分と一手い城を責一手ら木下より向ひ軍を挑む朝倉勢をうれを見て同じく二手に分てて働さげるを見て秀吉采配を取く左右より招けを前波富田が七百餘人横搶ふるうて亂とうくふ淺井朝倉の両勢是より驚き引色ふるうてうえける処へ増井甚内毛谷猪之助瀧川彦右衛門大橋長兵衛が七百餘人

同じく突てかくふるひどみ淺井朝倉三方に敵をうけ透間ふくせう立らと四度路よりくて引退く長政景鏡これを見て城責を打とてくまづ木下と戰へやと大将真先よりくめば流石江北越前の諸侍を劣らじものと進こけう木下が勢をかくあるべしとか祢てよりおのひ設けことるとば淺井朝倉が勢競ひくとども物のかそとをぐ必死よりて戰ふくう宮部善祥坊い木下が援よ力を得て手勢五百餘人城戸を開て出小勢ふとども究竟のもの共ふう亂を立たる寄手の中へどつとあゆいて駈入今日をかぎりと突てかくれぞ朝倉景鏡手勢

と下知し善祥坊が切て出しい幸うか此間ゑ城を乗取んと善祥坊をいざなひ浅井勢ゑとゝ宮部をさゝて進む処へ巽の方より礒野丹波守が五百餘人朝倉景鏡の後へ廻り鉄炮を打うけ関を作うけ丹波守真先ゑ進て突立けゝゝゝ越前勢こゝろを猛くあめへども今朝より城責ゑくたびをし上先刻よりの戰ゑ身神共ゑ勞をして礒野が荒手ゑ碎易し右往左往ゑ散亂しけるを見て丹波守あゝ面白の敵の遁足や何處までのと大手とひろけ竪さま横さまにめてうくおへ十文字切てい突突ていい駈破をとゞ相從ふ兵士どもいつをも劣らぢまけゝゝと駈けるゑぞ

朝倉が五千餘騎蜘蛛の子を散をゞ如く行衛も知ぞるゝにくう秀吉いよゝ力を得味方をくげまし息をも繼をゞ縱横ゑ走を廻をバ前波冨田毛谷増井の四人い降參くめの軍あを身命をおゝまゞ粉骨碎身して責戰ふよう浅井が勢も終ゑめを立らをて敗走ゞ朝倉勢もうゝえう総惣崩をゑ崩をゝとゞ長政景鏡鞍の上ゑ立上うせをつけく下知しけをども立直ゞべき義勢あけをゞ惣敗軍とゝく這々小谷へ引返を木下を礒野宮部と一手にゝく首ども多く討取勝関をあげて勇ゝ悦び善祥坊を宮部の城へ引入秀吉い虎御前山へ引返し

打取所の首ども岐阜へ贈り軍の次第を言上したるに信長大に感賞し給ひ藤吉郎が武功今日
ちぢめねとゐ居城にて敵を追崩し宮部を
たをけて左ぢうの大軍を切崩し善祥坊を救
ひ〳〵と古今無雙の手柄と云べしとて即時に感状
をとり〳〵め恩賞の品々を送り給ふその外礒野を
ちぢめ前波冨田等四人の輩つもそもく相應に御
褒美を被下けるにいつまを面を起してたうとて大
に悦び木下の人の功を推舉するに私あることを感
じたる虎御前山に帰りて前波冨田一同に木下に
向ひて猛く勇猛にして機變を知ることを妙を得る

しと聞つるとも今日の御振舞ゆゑに鬼神ふひ
らしとやうべくしひうるる處を以て必勝の機と知
ぜられしやうや近頃不審られぐるしい尋ぬるに何
を知るふぐく長政い智あり勇あり若き人に多く
得ぐること大将あるとそれに從ふ待ある柔弱ある
のいあるものこと苦くさるとも姉川このうち長
政の軍ぶく兎角合期せで敗軍度くに及ぶを以て
胸中怒氣ふるぐしくして寛緩の氣ふ朝倉い
元より主戰に加勢の事ふるを以て怒氣ふ
く寛緩の氣ふく只手をふるぐるを以て大事
とゐ長政怒氣に乗し二万の大勢にたぐ一舉に

攻拔んとこゝろゝゝに只その自己の勇を知のみ
して人あもまく勇あることを量らざるゝ故そゝ
長政怒氣をさゝ寛緩と計ア二万の勢と三川よと
け一手まてゝ當城を押へ一手あてゝ宮部を圍ま
せ一手をゝ游軍とゝて真中ゝ備へさをたらんゝ
も某當城よゝ切て出るゝとも左右あゝく長政ゞ旗本
に喰付ゞさうるべゝこれわどのゝ長政ゝゝざる
よゝあゝざれども怒氣胸間ゝふゝちゝるを以てい
きをあのひ忘るゝあるべゝ大將ゝくの如くあを
で士卒い猶さゝ心付ざゝゝあゝ我ゝれを知ゞ故
ゝ後よゝ短兵急ゝ責ゝるゝ小谷ゝ少々勢をのと

ゝ置我打て出ゝ跡へゝるゝとあゞ虎御前の砦の
そのどもわとんと難義をべゝのを運川さ
ぬるとゞ名ある大將も匹夫の手ゝかゝるたとゝぞ
負ゞゝたる圍碁ゝ似てうてゞうゞわど負るも
のゝうゝとその態の拙ゝくゝふゝあゝで怒
氣のたゝゝ勝べき目を塞ゞゝゝあゝそをい敵の
とゝ我今日の軍ぶゝまゝとゝ危ふゝゝゝとゝうし
ゞ幸ゝ勝とを得ゝるゝと誠ゝ鬼神のたをけとゝべ
しゝまゝゝく面々も此後如是軍ゼゞ必定大敗軍
とゝるべゝ心付ゝへゝやとゝゝゝけとゞ四人の輩
いゝく木下ゞ深智ゝて神變不思議の度量ある

ことを感心しあるを末代の良将やと心のうちよりわめきうけう木下諸士ふ向ひ淺井勢ふてびをと来らんもちろうめ〳〵防戰の用意をべしとて役所役所ふ番兵をもつ〳〵持場〳〵と嚴重ふ沙汰し置けどもされども淺井長政い度々の敗軍をいしち二万ふ餘る大軍を以てとび宮部如さの小城い時の間に攻拔べしとあるひしも木下ゞ小勢ふその後援ふ切くゞさと兵士大うと氣力を疲らし勇氣とうしあひとのもくゞ在所〳〵ふ引込てふ〳〵び出べき氣色ある朝倉勢い猶更敗軍ふこうして本國へ引歸さんとのこ望こけるとは景鏡も斯てい所詮

幾たび戰ふとも人馬を疲らし士卒を失ふのこふして味方の勝利あるべうとあるひ長政ふ向ひまづ暫く此儘ふすてさし置と士卒の疲をを休息をしめ敵の働さぶうを御覽ぜうとそをふ應じて御計らひあるべしい我等も一すの帰國して何時ふても御左右次第義景めうとも出馬をべしとやけもび長政も本意ふ〳〵おもひしうどもまさうぶむべき辭もかけもび同心しけるよう景鏡ハ十一月中旬う越前國へ引返ばされ共殘らび引返さんもあるように心ふくおもひけるふようい小谷の近所町野山ふ越前の中島惣左衛門堀江吉助平泉寺の衆徒西林坊等をとゞめ

置淺井家の加勢とゝそのうちよ雪ふゝくあるけとも長政も木下を打出るよ及ぶゝ合てゞ居たりける

将軍義昭卿信長を滅さんと謀る事

并信長疎意あるさ旨陳謝の事

爰ふ不思議の大變出來とう何事よやといふよ将軍義昭卿去頃よゝ信長とゝゝゝ其威の壯んなるとよゝゝ何卒討ゝゝて天下を思召まゝに政とゝゝし給へゝたちまひける是い義昭将軍ふ任とゝまゝふといへども御性質兼懶ふゝて大樹の器量ふゝはゝさぶ四海弓箭の棟梁とゝて兵馬の權柄を取まゝよ堪させおそゝねば

将軍とゝふい名のゝゝて天下の政事をべて信長ふ帰したまひとのゝと将軍の御威光よゝ信長の進退を仰ぐ世とゝゝし故ゝるべゝさまゝこゝれ信長の心よゝうのとめゝゝことにいあゝゝゝ将軍家い御身持惰弱ふて婬酒をこのませおひ政道よい依怙あゝて邪正を糺しゝまふゝ及ゝぶ功あるものも御意よゝふゝねば打をてゝ閉こあゝうゝ忠もふゝ能もふけゝども御前ふ伺公ゝて御心をとゝるのゝふい過分の所領を下されゝふい関國を恩賜あゝて非道の事のゝ多くゝまゝけゝると以て信長ゝれを歎き度く諫書を奉うけゝるゝよう結句いぶとゝのゝとゝがゝめゝゝとゝその上信長ゝゝゝ天下

の武士そべて将軍と仰ぎ奉るべきものとと思召立たける御心の内ちそろふ々もとされども信長ち人数多く持て國あまと領知それぞれとを追討あ〳〵んと又たやそ〳〵して如何そべきと内々その御企あるてまげ甲州の武田大膳大夫入道信玄

元亀三年十二月六日義昭将軍權大納言ゑ任じ従三位ゑ叙〳〵ゑ御年三十歳信玄ハ五十二歳あく

越後の長尾輝虎入道謙信ゆそ中國の毛利輝元く〳〵ゑ四國九州ちそ〳〵弓矢取て聞えるるめの共へ御内書を下されて信長退治あるべき由と仰下さ

たけとで将軍の氣隨ゑ去ことをれぞ〳〵め〳〵立たしそ〳〵〳〵び實ゑ信長逆心〳〵て将軍とくる〳〵め奉あとあのゑのをあるべ〳〵まこい信長の權威を紛〳〵公方の御頼こを幸ゑ軍を起〳〵信長を滅し天下と管領をやと思ひ立〳〵のもあるべ〳〵就中武田信玄ハ信長と縁者ゑ〳〵懇志を通ぞる間ゑもどもこの頃信長の威勢日く月々ゑさゑんゑるとそ〳〵〳〵扨ハ先年ゑう信長甲州へ親〳〵く使者を送ゑ進物のめそく丁寧ゑ〳〵い我をつゑぞ置おのれ一人心のまゑに上洛〳〵天下の權を取べきためゑとを欺こ〳〵謀とそ〳〵るあそろ〳〵ち心の男

ゆゑ今わど信玄を左様よあざむくべきの又あうとも覺つぶとゆゆく浮靡と世と送るうちよ終よを信長ゞたゆよ國を取きんとも計ゞ〳〵彼ゞ權柄のいまざさの〳〵盛んるゝねうちよ打倒をて如ド と思ひ付〳〵よう将軍の御頼をとゝやうよ承引し奉うしるうさをとゞも信玄北条氏康氏政とも境を接〳〵弓箭を取合ふと定ゆゝゞ又遠參の間の路をひ〳〵けぞゆを是よて上洛一日〳〵と延引きう又伊勢國司不知齋入道も御教書と得て大よよろこび浅井朝倉と牒〳〵合をて信長をうち亡〳〵多年の塾懐をとるけんりのとるどおゆひ立ていづをを

何とも信玄とそ〳〵めてちや〳〵上洛るゝ〳〵めくと催促るゝ〳〵ゞ今年元亀三年十一月中旬信玄将軍の御使上野中務大輔と伴ひ三万餘騎を率〳〵甲州を打立遠州よ亂入〳〵多々羅飯田二股の三城を攻落し

元亀三年十月十二日天野左衛門尉を案内者と〳〵て多々羅飯田両城と攻落〳〵見付よ陣を取濱松の兵と一言坂よて戰ふ武田四郎勝頼二股を圍むと云

勢破竹の如く味方ヶ原よ打上て陣を取

十二月廿二日信玄四万餘騎濱松八千餘騎味方

ケ原ニ戰ひ廿三日未明ニ信玄刑部ニ引退て陣を取ラるゝニ越年ヲといふ

あくまでも元亀四年正月三日刑部を立て三州野田の城を取巻

野田城主菅沼新八郎定盈ハ加勢ハ松平與一郎忠正四百餘人ニて籠る

四十餘日の合戰ニ城中變心のものあるて籠城かなとび菅沼定盈松平忠正自害して士卒を助けんと請つるニ欺て両将を擒ニ信玄の威勢あびたゞしきゆへニ信玄ニくろひて病あるて二月十六日甲州ニ引返をゞも上方ニてやこをしらゞ信長

追討のため信玄大軍ニて三州まで攻上り只今野田の城をもこんで攻るよりこれを責落しあゞ直に濃州ニ押寄るか尾州より勢州へ打入るかいづれとなも上洛遠うゝしとの沙汰をさうゝあるけるあよ

ア今ハ憚る処なゝとて諸國の大名へ信長を討く御感ニ預るべき由の御教書を下さゝ三好左京大夫義繼和田伊賀守惟政を以て執權とぞるゝをける三淵大和守藤秀長岡兵部大輔藤孝二人いけゝうゝぬ御振舞ハあゝて言葉を盡しゝ様くニいさめ奉うしろども將軍更ニ聞食入らゝとゞ五畿内の軍勢を催促せゝゝ洛中各ゝへ兵粮矢錢とうけく譴責あゝもあるゝ京都以の外

騒動せう信長この事と聞と直ち上洛あるべしとの事ゆへ
と木下藤吉郎秀吉その身い虎御前ち在城し羽檄を
飛して所存のあるむきと言上ゆへ信長これを披き見あ
ち将軍家うゑる企をゆへ却て織田家の御隅運
らじめすてゆへども神速ち上洛あるて公方家と御敵
とゆうあふと聞えて後日のため然るべうゆへ依て一ずい
公方家の御憤るふでうとゆへと御佗言仰上らるとて然る
しゆへ御聞入るゆへとも御佗言仰上らるる方
可然ゆへその上すて御聞をとるゆへ将軍の思召うくの如
しや治うゆうゆへ天下ち兵仗を動うゆへ乱と興しゆ
へ将軍の御職ち御隠居とをゆめ奉

るゆへ此処大切の御場合すてゆへと言上しけゆへ信長大ち感
とあゆへめうをとあつ上洛の催ちとゆめらるを公方家へ
信長身ち あゆえるゆへゆへども思召ち違ひゆへ ふうゆへ奉
恐入ゆへ由村井民部島田所之助ゆへ日乗上人を使節と
して京都へ上を御詫言と言上ゆへ且御赦免ち於てゆへ
向後信長いうゆへ以て疎意ゆへ忠節をゆへ申べき旨誓
紙并人質と進上仕るべきとまで仰入らるしゆへども将軍更
ち聞食入ゆへとも三使ち御対面もゆへ追帰さるに一向ち
御合戦の用意とそ見へたゆへ三使もとべき様ゆへ
下向しけるち江州瀬田の住人山岡中務丞ゆ子の三井
寺光浄院ち住しけるとめし出さると大将とし山中の

磯貝新右衛門渡邊宮内とて添らるる甲賀の地侍と山岡一類あるとぃことをもつて催ふ〜堅田石山の両処ふ砦を取立石山ふい光浄院とて〜め磯貝新右衛門甲賀の者そぐ〜八百餘人をこめ〜る堅田の要害ふい公方家ふう曽我兵庫助助乗伊勢九郎右衛門貞頼を大将とて渡邊宮内と案内者とて軍兵一千五百餘人を籠ふ〜兵粮玉薬とぞ〜ゆ〜び用意し信長上洛あ〜ば支へ止むべ〜と待うけたう岐阜ふう京都の首尾いろぐと待るびふ処へ三使立返り将軍更ふさ〜めいをさせふいそ〜の上ふ堅田石山ふゆ〜の如〜と言上〜けるべ信長さもあるべ〜とてさ〜ふ驚きふ色もあ〜それわどの御身ふい誰ぞあ〜て奉り〜ぞ空うそふひてゆ〜けるわど上方の味方ふう追く注進あ〜て京都の騒動ふのめるべと告たり〜ゆども信玄の實否いゆぐ定うふ聞へぞれぞ信長上洛あ〜その跡へ武田勢亂入をんもそうらをを見合を居ふふ処ふ禁裏ふう将軍家合戰の用意とうどうあ〜て帝都の困窮以の外ふ〜ゆ〜上洛して異見と奉り畿内静謐とぞ〜むべ〜と仰下さるけるふう信長ゆ〜ことふう〜ゆ〜る勅諚のあるうへい何とて猶豫仕るべ〜やされども自國の〜ども心えあ〜まづ先手の軍兵とさ〜のぐを宣旨の御うけをやべ〜とて柴田修理進勝家丹羽五郎左衛門尉長秀明智十兵衛尉光秀蜂谷

兵庫頭頼隆四人を出立させあるべ
禁裏御所へ入皇百七代正親町院の御宇あるとの勅定
とゝふい木下藤吉郎虎御前山よりて計ひ処あるべ
いふ或云この時兵粮矢銭催促とらるゝこと嚴重ありて
禁裏の御用途を調進ふ及ぶ朝夕の供御の御設を
でふ闕如たるふ似たりけるよりて道喜といふものの褐
布のひとへにして手製の茅纏を獻上し局方の食ふあて
〳〵ふう饌をゆちんといふよりいくらその真偽とゝ
らば
村井島田日乗の上洛ハ天正元年二月のこと織田家譜ふ見ゆ
重修真書太閤記四編巻之十九 終

重修真書太閤記四編巻之廿

石山堅田合戰の事
并光秀奇計堅田城を乗取事

公方家の御心よりて京洛中穏やかあらぬ町人百姓
ら矢銭の課役ふ困窮し山科白河の地下人等ハ堅田
石山両城の兵粮運送ふ苦しめる由濃州へ注進ふ
きうあるふよりて信長ふも上洛あるべしとてまづ
柴田丹羽明智蜂屋四人と先鋒として一万餘人元
亀四年二月廿日岐阜を進發し江州ふ責入廿四日
石山の城と圍てあるとを攻たゞし當城ふくらのこと

けるてのまぐ普請成就をば要害も全のうざる処
ある織田家の大軍雲霞の如くさぐめさいをて
押寄しうば城中の兵士八百餘人こや色と失ふく
見へたりけるを光浄院うくてを一戰も心えるし
とおのひしうぐ乘廻しく将軍家ふたのまを奉を
し身の云がひあしとてびまけどをとうく臆
病神ふさそれ戰をぐき氣色も見へば城の大将
光浄院の叔父山岡美作守同對馬守両人い信長無
二の味方あをば是ふたりて降参し城を渡して
退去をう
山岡美作守景隆い大伴氏ふて勢田の城主山岡

信濃守の曾孫ある父を中務少輔景猶とのふ景
隆の弟對馬守景佐膳所の城主その弟景友い道
阿彌也その次い甫庵ぐめを石山世尊寺の住
後ふ還俗して甲賀佐右衛門尉と云ふの甫庵元
ふ三井の光浄院ふ住をしとも云
柴田以下いづをも石山ふ入て士卒を休息をし
けるふ光秀ヤけるい當城落去の事京都へ聞えふ
ぐ定めて堅田へ加勢とさ下さをんと覺へれい
そぐ加勢の下らぬうちふ堅田を攻取て然るべし
とヤにふう何ふも然るべしとて陸と湖上と二手
ふふうて押寄べしたぐし當城の成ぐも大事ふう

柴田殿御殘うゐべ〜新參の役ゑ堅田へ〜と光秀罷向ひいらんとやけ是ぞ丹羽蜂屋の両人も何さま此義然るべ〜柴田殿い老功とゝひ織田家隨一の大將ゑ〜ゑて京都を押へゑふべ〜とそ〜めゝ〜ゝぞ勝家もこゝとゑ同心〜三千餘騎ゑて石山を戍ふ

柴田修理進勝家四十七歳丹羽五郎左衛門尉長秀卅九明智十兵衛尉光秀四十六歳

長秀光秀頼隆三人七千餘騎ゑて堅田へ向ふとゑ光秀い坂本の城主ゑゝとべ此邊の案内者たゝそのゝ上久〜〜越前ゑあゝて將軍家隨身の人〜の剛臆

ゑゝ弓箭の程ともゝく知ゝとべ陸手の軍い丹羽五郎左衛門尉三千餘人蜂屋兵庫頭三千餘人二手ゑゝとゝて辰巳ゑゝ戌亥ゑむけく責らるべ〜光秀い千餘人ゑて湖上ゑゝ東の手を責破るべ〜と約束〜卯廿五日未の刻ゑ打立長秀頼隆六千餘人陸地ゑゝ押寄関を作ゝ鉄炮を打ゝけ責ゝゝふ寄手ゝとゝざと備をゝゝ城兵をあふどゝたる体ゑて おめゝさびんで責けゝとべ城中ゑゝこの体を見そ ゑ〜伊勢九郎左衛門尉渡邊宮内一千餘騎ゑて切て出面もゑ〜び突ゝゝ左往ゑ逃ゝゝ城兵ともゝるべ〜と勝みのゝ

追ひくる長秀頼隆踏止り返さくと下知しあぐらをとて鞭打て逃げとび伊勢渡邉をさしあしをとと呼たりしあのこびと遠く追たりけり曾我兵庫助ふとを見て長追い敗軍の相あり〻や引返しあしゃと使をのつていとをしうども長秀頼隆のつぎとおひくふ欺うは伊勢渡邉あまりにあのしろき寄手の逃足のあふ曾我殿よりも打出あふて見物あるとしひしひ既よ遠く追うけ〻引返さんけしきもあしあふ処へ湖上より商人船うとあげしして五艘七艘あぐつとしろけるゞ堅田の浦へ寄るゆいな鉄炮をとびしし打うけ城の東の湖をたのく

淺はあうける處より明智十兵衛光秀千餘人ふて責付たり曾我よ従ふ兵ちづうふ五百餘人周章騒ぐて防戦ふ及びび狼狽はとふ限あし光秀んげしく下知して兵士をいさめ諸寄〻息をも續をび責立ひとび明智彌平次光春真先よそ〻〻塀をのて越責入うり光秀こをを見て彌平次討をふ續けやと云言葉の下より次郎光忠弥平次ふ續いく乗込ぞ城兵いよくうふるこさうさ大手の方へ逃出ふふよう曾我兵庫助手勢を勵はし乗入敵をさへ防ぐんとをる処を明智光秀塀の上へ攀上り手練の鉄炮を以て撰を打よ撃て落さぞやと覘視よ

て強藥あつて切て放さるゝ謬たゞ兵庫助ゑ中うて倒さるゝ明智ゞ郎等塀を越首を取んとひしめけども少し間の隔たゞ思ふゞうまて自由あるゝ其間ゑ曾我の郎等走て來う肩みうけて逃出し辛き命を助うけて

曾我兵庫助助乘幼名を又次郎曾我太郎祐信十三代の孫あう父を又次郎元助といふ義植將軍ゑ從て浪々を助乘義晴將軍ゑ朽木谷ゑ從ひ後義輝義昭両將軍ゑ從ふ助乘の長子主計頭尚祐あう曾我流と云武家書札の式世ゑ傳るゝ大將ゞでゑ落失しゝゞ殘兵あるゝて悴ふゞゝ我

先ゑと逃失て城中ゑ支ふるのみゝなるゝゝみよう光秀ゞ手の一千餘人難あゝ込入て城を乘取大手の城戸をさゝ堅め役所〳〵ゑ兵士を配て備を立て是を戍る伊勢九郎左衛門渡邊宮内の両人い寄手逃たるゞ面白くて後を顧るゞ何處までのと追たうゝゞ渡邊馬をひうへゝあまうゝ長追心元ゑゝえや引返し城を堅めんと伊勢を呼止兵士をゑとめ堅田ゑ向て歸らんとするを見て丹羽五郎左衛門尉蜂屋兵庫頭六千餘騎を二手ふあゝてそえや進めと下知をあゝ大返しゝゑ取て返し左右よく伊勢と渡邊を取ゝめて無二無三ゑ攻付たるを始

めの勢より似も付ぞ伊勢を渡邉も散々よろけあや
まさと一戰よも及ぞ惣崩とよ崩と立てぞ引た
うける伊勢渡邉い大よ怒とちをわど怯く打負て
人よ面の合さるべきや爰よて一処よ討死きんと
踏止とども敵い六千餘騎目よあまる大勢あり七切
ども射とどもてもを入替〳〵もむわどよ伊
勢渡邉も二ケ處三ケ処手い負ぬたとん爰よて討
死とともよき武士よ出逢ふといあれまでさぞ雜
兵の手よ犬死きんを口惜や一まづ切ぬけ堅田よ
引うへ〳〵後の合戰よ切勝ん時節もあるべきぞと
敵をよいわどよあしらひ〳〵堅田をさして引返

城戸際よいることび今い心安〳〵城よ入て休
息をんとおのよ処よ城中よ門を開きて五六百
餘騎の勢をもて鎗の穂先をそろへくろけ出たと
び曾我の加勢と心をゆる〳〵油断をゆる〳〵よく見と
ぞ曾我ゞ旗よいあるぞてうの坂本の明智ゞ旗
あるいあとといいふと仰天〳〵扨ぞ早城をび敵よ取と
〳〵と見上とび城中よい明智ゞ旗ども立あらべ
既よ大勢入替アと見へけるぞ討のこさと〳〵
伊勢渡邉ゞ軍兵ども一戰よも及ぞ逃道のとめ
て敗走ひ前よりい冊羽峰谷ゞ六千餘騎関をあげ
い〳〵ちさまあ〳〵鉄炮を打うけ〳〵攻よる後よう

い明智が千餘騎面もふるひ追慕ふよう伊勢渡
邉京都とゝて只二人息も継あへず敗走ス丹羽
蜂谷が手へ首三百餘打取ば明智が手へも百餘級
うち取て堅田の城へ入よそう石山堅田の両城落
去てのち江州へ敵といふのの一人もあく平均
けもば四人の大将會合して當國へくの如く埒
明ぬもば京都へ直へ馳上るべけもども信長よう
の下知あけもば私の意よて上洛以の外へ自由ふ
う一ゆづ此由言上し重ねて御下知を待べゝとて
明智光秀と坂本へ残し置京都江州の通路を押へ
させ柴田丹羽蜂谷の三人ハ三月二日岐阜へ帰陣

し石山堅田合戦の次第を具さへ言上しけるへ信
長とのタへ満足ゆ此競をぬうさば直へ出
馬あるべきふもとども鬼角甲州の武田の容子定ろ
へ分らばあるひを東海道を尾州へよけるとも又
を木曽より東美濃へ打出るとも取くの沙汰ある
と以て上洛延引ふ〳〵けるが〳〵て三月十五日
甲州勢四万餘騎東美濃岩村へ着陣したると注進
あり〳〵ゆゑ信長軍兵を催促をゝ是ゆで信玄と
親〳〵しい我分國へ働らかはゆゑ為也今を
てへ和平を破て敵へ寄ゑを何とて余所へ見る
べきぞ始て武田との合戦ふ心あゝと下知して

ひざと二万餘騎威勢をめらやうして出陣あり抑
太の岩村い信長の姨壻遠山内匠助の城あるうしを
去年武田の一族あるうけふ秋山伯耆守信友信玄の
内意をうけ信友の心ようを一体まて東美濃へ亂
入〳〵岩村の城と責けるゑ折ふ〳〵遠山大病まて防
戰の手ぬるく行届うに終ゑ病死〳〵家督ハ信長の末
子御坊丸といふを養子とあ〳〵たゝうぞそれを大
将とゝてよく防ぎ〳〵うどもさる大變の折節あを
ば軍兵等の働合期をば城中心くと成〳〵ふゝう秋
山そのよ〳〵と聞やいふ大ゑ悦び岩村の地侍坪内
勘負といふものをらひ城中へ和談を入城を請

取岩村の後室を信友の妻とあ〳〵御坊丸をも信友
の養子とあ〳〵たゝ信玄大ゑ悦び信友を岩村の城主と
質とあ〳〵けるが後ゑ甲州へ送を遣ゝ人
を此ゝろ信長い江州軍ゑ隙あ〳〵て岩村を救ふべ
き手當あく殊ゑ秋山ゞ私の働ゑ信玄と手切をん
も如何あうとて知ぬ様ゑて居ゑひ〳〵也然るに甲
州勢四万餘騎岩村へ著ゝ〳〵うども信玄い來う
あゝとゞその上わどゝ甲州勢三州へ働きけるに
よう一両日對陣をゝ〳〵逆ゑて岩村ゑ少々軍兵とを
ゝ〳〵置と信長も岐阜へめゝ〳〵をゑふ日頃ゑ〳〵ば
甲州勢を追掛ゑふゞきゑれども京都めゝくの如く

るとゝび速に人数を引上ゆひ直に上方陣の用意をなすべしと

岩村城主い遠山修理亮頼景加藤次景廉より以來代々あるゝに任せ也頼景の妻い信長の妹としへども實い姨なり御坊丸い信長の五男元亀三年八歳と云秋山信友あるひを晴近に作る頼景の一族遠山相模守景行と元亀三年十二月廿八日秋山と合戰して景行秋山の為に討るゝと上村合戰と云

長岡荒木等降參の事

并将軍家信長和睦の事

京都にて堅田石山にて流石に三月四月い敵を防ぎあんものとと思召けるに両城とも一日悉く攻落さると光浄院い行衛しらを曾我い深手を負伊勢渡邊も浅手にあるとも三四ケ處にて切疵をうけ迯上りうぞ三淵土佐守長岡兵部大輔とも御合戰をぐしうゝとも諫め奉りうゝとも将軍更に聞食入なとゝび猶合戰の用意を被成けるに三淵土佐守長岡兵部大輔より合て語ひけるを迎をかくても合戰と好まをゝて我等ゞ諫を聞食入らるゝを去とも此軍勝をゝぬと鏡にうけて明らうるゝいざや我等信長に一味して将軍の御大

事と救ひ奉るべくさあらんまゐ将軍の御方まあ
うて討死をんまちを遥まゐまゐたる忠義あるべくと
て信長いまる上洛せざる前まう佐久間右衛門尉まゐ
就て降参のことをやひまゐ摂州茨木の荒木信
濃守村重も信長ちそ終まゐ天下の権と執あまづけ
ととあのひうべ公方家の御頼まゐ憑ぎび居ちう
けるぎまとも信長上洛のまゐと聞て摂州十三郡
某まゐ仰付らまゐちぎ御旗本まゐ参上して忠功と竭
をぐさまゐを同じく佐久間まゐ就て言上けるまゐ
まう信長心中におぎめまをける様長岡荒木ま
どちそ将軍の御方まあて隨一のものあるまそ

ちらび如斯やを上ち将軍の御企とまく人まあ
ちとおのてまとあひうことよさてい何とおぎめを
共誰ち御方まゐ参うて忠義をび盡をぐさその上まゐ
村重摂州一同まゐ切取べうとの所望大膽不敵の願
ひあまとぞも三好をちぎめ良もをもび摂州まゐ敵徒
おとつく鎮めぎめ然るを村重まゐ任をて暫時まゐ
切鎮めあぎをまとまゐ増ちるとあるべたとひ切鎮
め兼ぬるとも味方の損まあうび速まゐ願の通を御
免あるぎまゐやを遣ひべうと信盛ちへ御下知
あうて時日を移さび上洛うう町人百姓の困窮を救
ふべうとて三月廿五日岐阜を立せるひ廿七日江

州志賀の相坂へ着とみるへぐ長岡兵部大輔藤孝荒木信濃守村重御迎ふ参上し早く御着陣あるべし御悦と言上し信長藤孝とめさると将軍家無益のことを近頃以て氣の毒ふおぼしめし由仰らるべしらば藤孝こゝろ強ちふ将軍家思召だうりにいたらば諸國の大名だち織田家の武威盛あることを嫉み将軍を勧め奉うしいたく藤孝あど寄くふ諫め奉ういへども更ふ御聞入なく事の爰ふ及びしこと實ふ天魔の所行ふいべくは某将軍の御手をとらると御幕下へ参ゆゞ不忠のものと思食るゆとんと恥入ていへども某等将軍の御手をとらるゆとゞ将軍定めて心

細くあるべしめしゆとんふ将軍の御心よはくあるゆと自然ふ合戰の御用意もおゞしめしとゞやませものべく存ゆて御陣頭へ参上仕ゆひしこと詞のうちふ将軍と枚奉らんとの本意明らうふ聞えしらべ信長みもその志を感心ふしあひ天晴誠忠篤實の君子やと心中ふ褒美しあひ心易うれ将軍の御事何とてあべく計ひてゆと答へあひしらべ藤孝も安堵の思ひとなりて退出ひその次へ荒木村重御禮ゆひ信長のもひとゞ側ふる饅頭を取て刀の鋒ふ貫き荒木の鼻の先へ差出しあひ何ふ村重信長の心ぢうよべ味ふて食べしと宣ひしらば側ふ侍坐をしのものも肝をけし降

参の大将であるに輕卒の御振舞やと手に汗を握りけるが村重をそこ〳〵も騒がぢをるくと差よう両手を座に付き思召よりての御菓子謹で頂戴仕るとやも果ひて大口あさ饅頭を銜て引取けるが信長刀をとりやく〳〵引ぬひ實に日本一の大剛の者う所望の通う働さゆへと仰らるゝ直に摂津守と改てヤ旨仰出さるゝ〳〵よう村重面目を施して退出〳〵けるに信盛村重に向ひさう〳〵も危ふう〳〵所あう〳〵を何の氣色もなく取成〳〵ひ〳〵とよと云けるに村重いや殿の摂津を切取と計ひあひ〳〵ののと何う否こてやと答へけるに信盛いよいよ不審てれぞその心を問〳〵のに村重いやとよ饅頭ら満仲ふう摂津國の大将ふう〳〵そもと刀に貫うとゆへい切

取との御許ふるべ〳〵と存ぜひけるとやけるにようも何も何もあとといひ〳〵感じけう

村重い摂津六人衆信濃守義村の嫡子幼名十二郎長ドて彌助と改め信濃守と稱〳〵今年廿七歳ふう

信長七ようう山科を經て東山知恩院に本陣を居らるゝ偖使者を以て御侘言をヤ上ふひ〳〵かども御許容ふ〳〵是へ甲州の武田勢信長の後ようう切て上ることや遠〳〵とゆひふさ頼うようう氣を勵やう〳〵答へふひ〳〵然ども将軍近習の面くへゆるひとふうそて防く勢いふうけう信長四月三日洛中に入所々を焼拂て軍威を示さるけるとも将軍とうく大名等ゞ後援ふるべく思召へうぬ体にてやう〳〵ふるべ信

長坂にいたりて翌廿日大軍を率し二条の御所を取圍ミ奉りけるゆゑ将軍家ちからなくして驚きあゝめし信長の許へ御使を立られ御和平あるべき由仰出されしゆゑ軍勢どもを引清水吉水両処へ引取せ同六日織田大隅守信廣と名代らして御所へ御禮ヲ上別ふ又三淵大和守ふ就て是まその御政道すべい當時の世の中治アヒヤ平ぐ善政を行ふをもとめべしと言上あるけるゆゑ将軍家御心よいそこゝろ移ぞもいづまも御改あるべき由仰出さるつるゆゑ翌七日信長京都を退去あるて江州守山へその夜い止宿ゆゑ丹羽五郎左衛門尉を召ゝ将軍家和平の義を仰出さるつるゝゝ是い偽ゆゑやゝて又御企あるべしその時い瀬田山田矢橋の渡アを差止めふるらんその時い朝妻より直ふ堅田へ乗らんとのふゆゑその為ふ大船二三十艘用意をべしとゝ仰付られと同十一日岐阜へ還御ゆゝ終ぬ

重修真書太閤記四編卷之二拾終

重修眞書太閤記四篇巻之廿一

三淵大和守諫言乃事
并将軍義昭卿槇の島御動座の事

伊訓に云く上ふ居て克明ならざれば下とし〳〵く克忠わ
ヲ人と與ヨして備はるを求めび身を撿ること及ざ
るがごとくなれば以て萬邦を有りふ至るとのやさ
きば将軍とるりてハ天子の御代官とゝて四海を鎮
撫し天下乃政道を預う内よ仁徳を重ね外ふ威權
と嚴重ふをぢきば太平の代ふりとも治めがゝし
況や戰國ふ於くおゝや爰ふ将軍義昭卿織田信長乃

忠功ふ依て将軍ふ任ぜられ公方と仰がるゝ身ひしハ全く父母の恩ふも勝まりといふべし然るふけるの程ちそあれ年月立まさるひ次第ふ氣隨ふるゝを られ仁ふく智ふく徳ふく寛裕乃量なく大度乃器ふ於ゝ〳〵ほさぐれバ沙門たゝ〳〵紀行法の嚴密なりしも還俗まして戒律を解きゑひ淫樂の欲を恣ふしく晝夜の酒宴不時乃游興ふ耽らせゑへバ信長ときを諫めゆ上らゝと度こふ及びけるのゝふゝび信長ハ勇猛剛強の性質ふしていそゝ詞もものりくら飾うふく荒こしきともあらけるふらう義昭卿御身の正しかゝぬが故よ忠臣の實意深切よ

して諫むるさとゝの御耳ふ違ふとハ思召を信長上を輕んド奉う公方を蔑如をる所ゆと怒らせゑふと うそわりあけき御身の穏當ゆ わゝ〳〵ほさぬと をぞゝうゝゑふしゝそゆ信長をいぶせき者よ於ゞ〳〵めけき終ふ信長を亡さバやとあゞ〳〵め〳〵立き諸國の大名を語らハせゑふとゝふ浅ゆ〳〵きとゝぐもゆう然バ心あゝん人を異見を加え奉う思召くさをゑふ樣よゝそゆべけき一味同心して漸治るべき天下を覆えさんと謀ふハ蓋信長乃武名を嫉む輩のさゝ〳〵らとゝふべきるゝされバ信長上洛ありゝく二条乃御所を圍て攻奉る日よされゝをそゝよ上洛して信

長の後を撃んことをこうり更ゑ一人も信長を拒めん
とするものなきハ将軍元ゝ勇氣よりぐ〳〵く心
臆しく剛腸いくさわひきまさねば御所をかこまし
耻辱ゲましき目を御覧ありてゝ和平の義を仰
出されしことたゞ一旦の難をのがれさせゑんが爲ぬ
るゑバ信長下向のゝち将軍ゝ御威光いよ〳〵あらへ
させゑひしことを深く憤らせゑひいてゝ信長ゝか
くまで押付らゑ一させゑひけん将軍といふハ名のこ
ふして天下の大小事をべく信長の進退ゝふことと
あゆうよ口惜きこと云べし我ハ足利将軍ゝ連枝よ
して征夷の重職を任とし三位の大納言よりし陽

を然るよいくのこと紀次第ゝあらせゑバ何ゝ面目
を以く前代将軍家ゝ地下に見え奉らゑゞ如斯
打こめられくおゝ〳〵はさんゝハ信長ゝ矢一筋射
うけてゝら快く御自害あゝべしとて同年七月ゝ
び信長追討の御教書を下されしゝども御味方よ参
う軍忠を致さんことを御請やその一人もゝし是を信
長の權威よ恐ゑしゝ故ゝゝ又三好左京大夫義継は
本領河州若江の城よりう御教書の御請をバやさど
却て諫書を奉うしゝふゝ是も御氣色ゝろしゝか
らびまく和田伊賀守惟政も摂州高槻の城よ居く将
軍の御書を賜ゝりまゑども近邊の地下人共ゞ一揆

を取静んゝ遑なきて叅上をゝびその外ゝ寺家の公人社頭の神人あるひは青侍北面の輩なんどなるまゝ
なるゝ千餘騎小過ぎるその上口ゝ物くゝしけ
ども弓箭の道ゝたしかなるゝ畠水練の理兵法義
勢ぞなりハ猛ゝ掛合の軍して勝べき色ハあもひ
もらゝび将軍も此勢ぞなりおて信長を敵とな
都の合戦心元なゝ思召つゝよゝ要害の地よ楯籠
らをゝゝく味方を招き集めんと然るべくゝく槇
島玄蕃頭ゝ宇治の居處ゝそ然るべくれとく即玄蕃頭
へ御教書を下さゝ槇島へ御下向あるべき旨を定なゝ
槇島ゝ山城久世郡宇治橋の西北十町余ふあるて一

箇の島なゝ四方沼深くして京ゝ三里半南なゝ
さて宇治川を隔ぞの城地方二町ぞなり一段たゝ
今は地續き一村と成る此地元ハ宇治殿の領なし
ゝ後ゝ土御門の太政大臣通光公よ傳ゝそのゝ此
家ゝて領きゝる槇島玄蕃頭昭光ハ本国寺十四本鎗の
一なゝ子孫今肥後ゝあゝ玄蕃頭の弟大膳昭久ゝ槇
島孫八昭武の祖父なゝ
三淵大和守藤秀ゝの由を承ゝ将軍ゝ御前へ叅上
近習ゝ性衆を退け涙を流して前ゝゝ度くゝ上ひ
いるゝ御聞入なく信長を滅さんゝと思召立ま
ひくゝども信長忠あるて功高く前将軍ゝ仇を復し君

を将軍とす〜奉り御所を経営〜奉りつるに至る迚
もべく信長の勲労なるいなる〜殊に當四月和
睦のらいまぐ幾日も経ざるに左様の御結構は然る
べ〜べその上當御所を出御あらせられ槇島に渡
御ましまさんとの御企誠に以て勿体なき御事に
ひ抑等持院将軍家京都に御所を造営あり〜は王
城を守護〜居ぶべく〜天下の武士を指揮なさせも
べ〜〜その遠謀を廻らさるる既に十餘代數百の年
月を経させられし此御所を立退きもうんとの御催
〜まして合戰の勝負大うさはあ〜らまくいるかな
〜いうか何ふ御威光おとろへさせもつても四海の争

乱をあげめさせもつべき御身なれば〜〜〜〜〜
御身にて左様の御企をふさせられ然も敵の旗乃手
もを御覧ぜられぬふるや御落支度をふ〜もつべ〜わど
まして此軍に勝きるべきこと思もよらぬ〜〜御教書
小應ずて馳上る御味方の大名あるとも将軍京を御退
居あり〜と承るゆゑ何計ろ力を落〜可申尋
常乃軍法をやるものも彼を知己を知ることは百戰百勝の
利あり彼を知ず己を知ることは百戰一勝を得ずとて
も信長もその祖斯波の家人なれども乱世の習ひ主乃
斯波を亡びく家人の織田ハ繁昌〜信長その家督と
く尾州一國を切ふびけ濃州勢州江州までも次第に責

隨へ今ゝ近國ゝ肩を並ぶべき大名ゝ〜然るをたゞ
もく征伐なさせゐんとの御結構を彼を知るをあらじ已
を知るをゐるべくと上べきか一勝を得さをゐるをぬこと
を既ゝ古人の辭ゝ分明ゝその上信長の不義何こて
くゆゝ永禄乃大乱ゝ御所回禄〜くゆゝ〜と信長の力
みく如斯經營ありて往昔らても猶御手廣ゝ住せ
ゐふこと入全く信長の勲勞とおゞ〜めさるべくこと新
〜きゝ条ゝゐへどを先将軍御事あり〜後阿波乃
御所らて御相續あり〜時君ゝ南都ゐる〜ゐ〜既
ゝ虎狼乃害ゝ〜くらをあゝべう〜と御母御臺所并
に御兄将軍家乃御仇を滅〜遂ゝかくゐぐゐ〜を

ゐふこと信長ゞ御味方ゝ忠義を盡〜ゝ故ぞらし
そをを亡さんとの御企らにも不思議の御事〜とをべ〜
先年佐〜木六角朝倉ゐるどを御頼あり〜に彼等ゞ軍法
はゝぐ〜ゝ〜ねバゝを信長をめされ〜ゐま信長仰
を承をを幾日も經ざゐふ大軍を興〜君を京都へ興〜
入奉う〜にあ〜ゞやゝあれゐて只今御教書を下さゝし
朝倉淺井ゐどのカの信長ゝ勝ゐき道理ゐをこと知
食べくゝ軍の習勢乃多少ゝ〜ゞゐどゝをそれ
ハ國郡を爭ゐゝぎり合のことゐく等輩のをく上をさ
〜てゝ〜ゞゐう實の理をゝ せば将軍乃大名を誅
きらんとを紀侍一人ゝ仰付らゝ河原表ゝく御成敗

あるんふ誰う仰を背きゞて然るに要害ふ籠らせゐ
るんとの御軍法こそかへりもぐも怯く聞えい遠き例を
あるひいと後醍醐天皇内裏を忍ひ出させゐひ笠置乃
岩屋ゑ臨幸ゐるゝ〜と忽ふ御軍ふ討うこゝるるゝと隠
岐國へ遷幸あるゝふひるゝや槇島と笠置と要害を
論じゅくバ多く日を同じくして中へきにあるゝ笠置
へめきれゝ武士と今御所乃御味方ゑ馳集うゝ侍中
と心の剛臆勢の多少まさ雲泥の相違ふひ次ゑ槇島ふ
御うつう信長と一矢射違へさせゐひ御軍うりとを得
ざゝ御自害あるんとの御本意ふひるゝ此御所を出さ
をるゝ爰ふ信長をめさるゝ御自害あら

んも同じ断ゑひるゝや幾度もくゝ中上古くゆゝども
御行義正〜くあるゝまちるゝバ人もそむさ奉るひを
信長ゞ御威光を掠め奉るゝ故と思召ゝるゝてさ
ゑ良薬ハ口ふ苦く忠言ゝ耳ゑさうひいとゝものいハゑ
ゝに此事ゑてひるゝかき口説けゝを聞食て三淵さ
信長ゑ一味仕りと言語道断の次第ゐり足利の家を
滅亡ゝるべきゝるゝ〜ゝて将軍つるく憤きゐひ大和守ハ
さゝるゝゑ執〜あるゝふゝバ此御所を守うゆゝ〜上ゑ
ハ既ゑ治定仰出さるゝゝを思召りへさきゐゑ及ゞ
ゝく七月朔日公達局方を召具きらし槇の島へ御移あ
るけるゝば大和守もあゝさるゝて涙を流〜く見送う

奉り日野大納言藤宰相伊勢伊勢守と共に御所小殘う止うく寄手を待心のうちおもふてあるしふり日野大納言とい權大納言晴光卿の長男權大納言正二位輝資卿乃ゝへ今年十八歳藤宰相とい高倉權大納言永相卿形う今年四十二歳

二条御所合戰三淵大和守討死の事

并秀吉梶川小密謀を授る事

將軍家再度思召立ことあるゝ宇治槙島へ移らきゐひ要害を構へ合戰の用意ふゝ由岐阜へ追こ注進來りしゝば信長さもあるべゝと兼く思ひつゝ然ば上洛をべゝとて七月三日田文を以く軍勢を催促をいつゝ五日岐阜を出馬ふゝあひ佐和山ゑ着御ゆゝあゝを虎御前山乃城主木下藤吉郎ハ竹中半兵衛尉重治ゑ兵士あゆゝ差添防禦の手當嚴重ゑ沙汰ゝ置その身ハ信長の御供をんと急ぎ佐和山へ參上ゝ御前へ伺公ゝ將軍家始終の御ゆうゆさ何とあさむべき思召ふやと尋ね奉ゑバ信長宜ふ樣將軍家そゞめハ一乘院の覺慶得業とく法相乃沙門ふておそけるが御母御臺所ふゝびゑ御兄將軍義輝卿の仇を報そんことを思召立きゐゝとて越前乃國ゝうそるゝく御頼仰越さゑゝゝ即日御迎を奉そ直ゑ軍兵を發ゝ事故ふく都へゝへ入奉り將軍宣下の大礼をとゝめをゝく信長ことを奉行ゝ御所乃

經營すで殘る処なく忠義を盡し動勞をいとゝびなゝりしをとをいつしか思召るとれさせまゐひ信長を滅をとの御教書を諸國へ下さるゝと先達て露見したゝ時御誤りの由仰られゆふゝ信長疎意存ド奉らびをゝ上く歸國したりしに時月も移さゞ今度の御企實ふ以て不當ふおそるゝをゝ天下の爲ふ此君を除き奉るべきあり元来自業自得とゝべし但御命ゐ存亡をその時ゑ臨まざればあらかじめ定めがたしと仰らきけるふゝ藤吉郎承そう仰の趣をさまるく聞えゝるゝ今度の御處置ふゝく君ゐ御開運あるべくゆへバ能く御賢慮を廻らさるべし三好長慶

が萬松院殿光源院殿両將軍を輔佐し奉てしをと涯分乃力を竭しくゆへども終まい逆臣の名を取ていとゝ上しかバ信長心得るふゝ由うをづゝせるゝ心乃ゝふて何とも仰らきを秀吉を淺井押えの虎御前山を預る身あり彼地を動べゝるゝと仰らしふきをども秀吉虎御前山の警衛ハ手厚くゝ付ていゆへバ更ふ心配ふくい御供のゝを一向願ひ奉る由ゝ上しかバ然バ召具しるふ尾さ由仰付らし六日佐和山を立きらしゝるて長秀ゑ仰付置きし大船ふ取乘て坂本へ押渡て直ふ京都へ寄るふとてゝづ白河の在家ふ火を掛く燒立るゝバ洛中洛外以乃外ゑ騷動を二条御所ゑそハ兼て期したるゝるが

ら日野大納言高倉宰相ふど引箭の家ふゝぬ方この御誤あゝんこと近頃以ゝ心ゝ〻いそやゝく御立退然るべ
ーとそ退を奉て三淵大和守藤秀以下同志の勇士をづうふ五百余人大門をさー固めて待所よ織田乃軍勢
雲霞の如くおー寄て閧をどつと作りける三淵ふつ
ことと打笑ひ天晴敵の大勢やゝる軍のふうをば我
等の手柄いつゝあゝるべきや日頃乃約束たゞゝぢバ我
よ續けや若者共とゝく大門を八文字よ押開きどつと
喚く駈出る履の子を打ふる如くもさまふくむいゞ
てたる敵ゝ〻ゞ桀基だそゝとふる如く當るゝと幸ひ
切伏薙伏突立けるゆぞ織田方の先鋒立足もふく敗走

を信長ふるかよ御覧ゞて御所方にうゝどの勇士あるゞ
ーとも思さゝゞ誰ゝんと不審げふ宣へバ荒木摂津
守村重御側よあゝけるゝが三淵大和守藤秀ゆてい
べーとやけゝバ可惜勇士ふう討死と決ーたりとゝ
ゝるぞ幸長岡兵部大輔ハちう紀間柄ふりいろふもゝて
ゝゝを止ふうと仰らるゝふう藤孝馬をはせ出ーたり
三淵ハ敵ゝも多く討取ゝが味方も大形うゝゝて漸く
十五六人とゝりゝかバ今ハ是ゝまでゝり御所へ引返ーた
害をゞやとおそひて向をゝふしバ長岡馬をゝめて馳
近ゞく三淵おもふ様藤孝ゞ来るハ必定我自殺を止め
んとゝりゝべー然ども何の爲ふう命をたゝふべきゝゝく

御所へ入る門を差うと云ともそく御所より走歸る既に大門を差固めし時藤孝そを付三淵殿ふそのゆさん信長の口状もありといへども更より音もきゝたゞ大庭ふ酒宴して舞い唱ひつ高さと笑ふ声ゆゑ聞えてそのら大和守切腹しけるバらふく追こふ自害したりける藤孝門外にのゐて様こふ音ふへどを答ふるおとゞきふりましかゞ是非ふく門を打破り乗入くゝれば こうはいゝふ大和守をゝゞめ郎等十五六人ゝふ一様より腹を切うつ伏ふりて死したりける藤孝涙とゝもふ信長の前へ出如斯ありく死さゆとゆゝらばあふそれや何卒して命を全くふさせ長く将軍家へ忠義を尽さきん

とおもひしものをかく空しく見ふきとのかゝゆさよと信長も涙ぐ涙よむきびゐくバその外の侍中いつまもゝゝひの袖をぬらしけりその藤秀ハ将軍いまゞ南都ふ行ゝゝしける比ゝり付従ひ奉り江州越前若狭美濃乃國こ御動坐の時ゝとしもゝふゝゝゞ供奉したりける忠臣ゝり将軍の御行義ゝゝしからざゝゝとゝゝふしくこ幾度とふく諫言ゆあるひい御勘氣をのゝむりあるひい御怒りを犯し心のおゝぶゝゞ忠言をつくし二条御所を預り寄手を引受けふぐしく合戰しそのゝいさぎゝく自害してゝゝびぬ藤孝ハまこと将軍の諫むべゝゝざるを知てゝゝをいさめゞ信長より隨

よく将軍の御身よあやふからんことを庶幾その所業をのく異かまてども主君をおもひ奉る處を全く同しといへ〳〵かくく二条御所破まし〳〵かば信長惣軍を率し宇治五ケの庄ふうつう柳山とゝふ処を本陣と定められ

五箇庄とハ廣芝岡屋上村岡本大和田の五ッを云柳山ハ信長の陣を移しまひしハ元龜三年七月十六日ふうとい〳〵

早天ふ川を渡して責掛るべしと下知きられける時木下藤吉郎秀吉軍慮を廻らしつくぐおもひけるハ公方家いうふ防ゲせるふとゝを味方川をゝさして責りめんふを槙乃島ならはゝ落城ならべしその期よふうんで御勢のうちにそ〳〵あやまつく公方家へ御自害をすゝめ奉るそのあらんもはるをがさしいふ柔弱ふおそ〳〵あるとも将軍そ〳〵雑兵の手にかゝらせをうんうらいとおそ〳〵めし御自害あらハ後悔をともかひあらじさあ〳〵ハ信長将軍を弑しまふと天下後世ふいをるべしいふをもゝとこと心を苦めけるが信長旗本乃勇士梶川弥三郎正教を呼寄御邊いうふもして城中へ忍び入信長乃勘當うけし休ふそてふ〳〵みば御心浅き将軍定めて近くめして信長の陣中のことをとはをもふビその時よりとく〳〵答へ奉うう〳〵守護し奉るべし

さて槙乃島落城の期よ及ぐ御自害あらんと紀かまへて止め奉るべしとて此川の先陣ときをとなみしとるのしバ将軍の御命ざに全くかゝ行きたらバ勲功ハ先陣と共よ行るべしと約束してぞ遣ハさしけり

重修眞書太閤記四編卷之廿一終